

スペシャルボーナス（ここからは、真相に触れております。未読の方はご注意ください！）

飯城勇三氏からのアンケート回答

Q1.「アメリカ銃の秘密」を読んだ感想

初読の時は、「中盤は退屈，終盤は感心」だった。『ローマ帽子』もそうだが、「何か“ない”ことを証明するための捜査」というのは，退屈きわまりない。しかも，『ローマ』は本当に“ない”のだが，『アメリカ』は「本当は“ある”のに，警察が一箇所だけ（正確には四十箇所か？）調べなかった場所があった」という真相なので，余計に捜査シーンが説明過剰になり，退屈になってしまう。

一方，バックとそっくりなスタントマンの存在が伏せられているのは，初読の時はアンフェアだと思った。ただし，再読時にはフェアだと考え直した。このあたりは，拙著『エラーリー・クイーン論』に書いたので省略。

Q2.「アメリカ銃の秘密」を以下の点から評価してください。（各項目 10 点満点。10 点の基準はこれまで読んで来たミステリ作品で，10 点と思えるものと比較して点数をつけてください。）

プロット＝7，サスペンス＝7，解決＝9，文章＝8，パズル性（論理性）＝9，感動・余韻＝5

Q3.あなたがもっとも好きなキャラクターと場面と台詞

キャラクター＝バック・ホーン。

理由＝このトリックを実行すると，バックは家族も知人も過去の栄光も捨て，別人として一生を終えなければならない。そこまで覚悟して娘のために殺人を犯した意志を評価して。

場面＝133p。ヴェリーがライオンズの銃を取り上げる場面。

理由＝さりりと書いているが，銃を振り回す男を素手で制圧するなんて，すごいことではないかな。

台詞＝80pのエラーリーの台詞。「四十一人いるんだよ！」

理由＝初読の時，ドキッとしたので。もちろん，萩尾望都の『11 人いる！』は，まだ読んでいなかった。

Q4.「アメリカ銃の秘密」の美点

①入れ替わりトリックでは，顔がつぶされていたり，首が切断されているのが普通だが，本作は違う。誰もが被害者はバックだと信じているのに，エラーリーだけが，ベルトの穴や拳銃から，“論理的に”別人であることを見抜く。そこがすばらしい。

②二万人の容疑者から犯人を四十人に絞り込み，そこから一人に絞り込む手際がすばらしい。

Q5 「アメリカ銃の秘密」の弱点

やはり，第二の殺人が不要。中だるみを防ぐという狙いはわかるのだが，第一の殺人だ

けで犯人を特定できるデータを揃えることはできるはず。ここをカットして中篇にすれば、文句なしの傑作だったのだが。

ホストのあれこれ

01.「アメリカ銃の秘密」を読んだ感想

今回で再読と再々読となりました。初読時は、舞台の派手さと犯人の意外性に驚愕して『もしかして傑作なんじゃないか!』と思っていました。周囲で『入れ替わりトリックや被害者の唐突さにアンフェア』と語られていることで、流されやすい私は本作品についてのファーストインプレッションを忘れてしまっていました。そして、今回の再読、再々読で感じたことは『アメリカのことを完全に忘れて侮っていた!』でした。どうして、こんな傑作のことを忘れていたのだろう。今、国名シリーズのアンケートに答えることになったら上位5作に入れるといっても過言ではありません。

QUEENDOM100号のアンケートで大山誠一郎氏は「パールストン・キャンビット（人物入れ替わりトリックのことです）は本作で3度目となる。そのためか、このネタを見破る手掛かりは、本作がもっとも充実している。」と語り、瀬名秀明氏は「世間の評判もいまひとつなので今回油断していたら、結末の犯人像に一番驚かされました。」と語っています。私も同感であります!

「第一の奇跡。恐ろしい蹄がまわりをそこらじゅう踏みつけたのに、この男の顔に傷がない。」(101p)とエラリーが語っていて、入れ替わりは『アンフェア』と指摘される方がいるかと思われそうですが、前ページ(100p)には頭の片側半分が陥没したと地の文で書かれていることから、エラリーのセリフはエラリーの主観でしかありません。頭の片側半分が陥没しているのですから、顔面が少し歪んでいることを示唆していると思われる。そして、キットや他の登場人物が、生前のバック・ホーンに似ている代役(スタントマン)を勤めた被害者と入れ替わっていることに気付かず、バック・ホーンであると語る可能性は高いと思われます。(死者の顔を見ると生前とは違って見えることを含めて、似た人物が入れ替わる可能性は高いと思われます)

つまり、作者クイーンがエラリーのセリフでミスリードしただけで、アンフェアではない、と言えると思います。

私は、大山誠一郎氏が語っていたように、3度目のパールストン・キャンビットで、そのトリックと手掛かり、ストーリー・テリングのブラッシュアップをはかるクイーンのみステリに対する真摯な姿勢に感服しました。また、1933年のクイーン作品は「Z」「アメリカ」「レーン」「シャム」と私が偏愛する作品が目白押し発表年となっています。北村薫氏が挙げるクイーン「天上の論理」の片鱗が著しく羽ばたいているように思えます。前年をクイーン「奇跡」の年と言われている(間違っていたらすみません)1933年は「奇跡のセカンド・カミング」と言えるのではないのでしょうか。

02.「アメリカ銃の秘密」の評価点

プロット=9, サスペンス=7, 解決=10, 文章=8, パズル性(論理性)=9, 感動・余韻=8(終わり方に, 読者への余白が多く見られる実験的な姿勢に)

03.あなたがもっとも好きなキャラクターと場面と台詞

キャラクター=エラリー・クイーン

理由=J・Jにバック・ホーンやキット・ホーンのことを思って, 動機について詳細を語らなかった点に, やはりエラリーはいいね!と思いました。

場面=455p。エラリーがJ・Jに沈黙を守るシーン。

理由=エラリーはいいやつだねと思えたからです。

もうひとつおまけを。

場面=368p。エラリーが口笛で歌劇<ラクメ>の一節を吹きはじめたが, 複雑な旋律だったため, しばらくそちらに注意を奪われた。と183pの悲しげな曲をハミングしながら室内を歩きまわるシーン。

理由=クイーン作品では曲名やアーティスト名が出てくることは少ないので, つい確認してしまいます。それと, 曲名が書かれていないと, とても気になってしまいます。

台詞=「(略)わかっている, けどわからない。(略)」(248p)

理由=真相はつかんでいるけれど, といったところがとても意味深で好きです。そしてツイーンピークスの赤い部屋の住人が与える言葉の雰囲気にも似ているので。

他, キャラクターであればカービー少佐(236p・341p)シーンであれば, ラジオでエラリーが紹介される場所(287p)。

04.「アメリカ銃の秘密」の美点

バールストン・ギャンビット入れ替わりトリックの新しいバリエーションの発明と事件解明への手掛かり提示(ベルトの穴, 銃の握り, 総稽古の服装, 金庫の壊し方, 馬のこと, 凶器の隠し場所), 意外な被害者の発明をした本作品は, 後のミステリ発展に大きく影響を与えていると思います。『Z』を思わせる犯人の絞り込みも素晴らしいです,

Q5 「アメリカ銃の秘密」の弱点

グラントに泣きついて, 映画に返り咲きたいと気持ちからこのショーが作られていったのに, バック・ホーンがなぜ代役をこっそりと殺害しなかったのかと理由を考えると。彼の殺害と自分の保険金, キットの守護者として彼女の幸せを見まもる位置につき, そして愛するカウボーイらしい暮らしから離れたくないことと, グラントへの恩返しからとかかんがえていたのかなともいえるのでしょうが, 犯罪に利用するホーンの考え方に違和感を覚えます。グラントに泣きついた時点ではカムバックを望んでいたのに, その後, 借金と脅迫から犯行に及んだということなのだと思いますが。グラントに泣きついた時点で計画していたのだとしたら, ライツヴィルものの片鱗が表れ始めていたのかもしれない。それをうまく表現できなかったことが弱点なのではと考えています。

また, 野村芳太郎監督の映画「砂の器」のようなエピソードがされて人物を掘り下げて行ったら, 面白くなりそうだなとも思いました。(エラリーも452pで動機や背景を同じ

ように考えているようです。でも、犯人を知ってはいても 433p のような理由で泳がせたのは、パズルを成立させるための弱点と思えます。)

それと、被害者がホーンだと思われていたけれど、エラリーがハリウッドから届けられた電報から代役の可能性を考えたのであれば、指紋を調べようとしなかったことも疑問に思うと思われます。他の作品でも同じような弱点があって、今回も同じようなので、これはクイーンがわざと指紋について避けていると思われます。

422p でホーンが二丁拳銃のうちの一丁しか渡さなかったのもパズルのためでしょう。

被害者をどのようにして引き寄せたのか (3000 ドルは強請, そうでなければ代役依頼料)? まったく関係ないボクシングの試合 (レッドヘリング?) 等, 色々と瑕疵はありますが, それでも面白いのですから弱点はあってもよいと私は思うことにしています。

(クイーンに関してだけです。)

その他

本作品を読んでいる時期にクエンティン・タランティーノの「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド」を観て, 暗合めいた奇妙な感覚にとらわれました。時代は違うのですが, 映画の主人公たちとバック・ホーンと代役との比較をするのも面白いです。映画も超おすすめ作品です。(読書会の参加者の一人から同じようなお話が出てきました。まさにミステリの暗号!)

またまた, ツインピークスとの関連を発見! 片腕の男, ファミリーネームのホーン (ちなみにベン・ホーンやオードリー・ホーン), ステットソン帽の保安官, 私のお気に入りのセリフ, 馬が出るなどがありました。監督のデヴィッド・リンチはクイーン作品に親しんでいたという仮説に本読書会でより近づいていることを確信しております。

(参考文献)

「エラリー・クイーン論」飯城勇三著 (論創社)

「エラリー・クイーン推理の芸術」フランシス・M・ネヴィンズ著 飯城勇三訳 (国書刊行会)

「EQFC 会誌 Queendom」